

## 24. 内因性

農作業中に急に気分が悪くなったり、脳梗塞や熱中症を発症する場合があります。今回は3事例の報告があった。

いずれも明確な病因を特定する事が困難であるが、状況を記述し、多くの方々と情報を共有し同じ状況に陥らないようにしたいものである。

### ①田植え終了後、めまい、吐き気をもよおし、救急搬送、軽い脳梗塞か

(平成24年 5月、夕方 7時半頃、自宅、男性・70歳)

借地や親戚の分を含めて、5町歩の稲作を行っている。田植えの2日目、朝8時頃から5時過ぎまで田植えを行った。夕方苗箱の片付けなどを終えた頃、めまいがし、さらに吐瀉物は出ないのだが、空吐き気が繰り返して起こった。

普通だったら、がまんをするところであったが、2年前の6月に日帰り人間ドックを受診したとき、腹部動脈瘤が見つかり、医師からは「今度お腹が痛くなって、動脈瘤が破裂したらお終いだよ」と言われており、お腹は痛くはなかったが、「もしも」ということで娘さんが救急車を要請し、医療センターに搬送してもらった。

検査と点滴を受けて帰宅。特に問題はなかったようだ。

消防署には20:01に息子さんのお嫁さんから救急要請があり、10分前後で到着、医療センターの救急に30分くらいで到着。意識は清明。歩行できず。浮動性のめまい。吐き気がするとの訴え。腹部触診の結果圧痛、筋性防御なし。呼吸18回、血圧173/86、血中酸素濃度96%、体温35.5°

救命救急センターでは、MRIなど画像診断などを受けたが特に異常所見は認められなかったが、とりあえず点滴を受け、朝2時頃に終了。翌日、再度受診するよう言われ、画像診断を受けるも特に異常なし。さらに1週間後に来るように言われ、受診。再度MRIを行ったが、特に異常所見がなく、「大丈夫でしょう」と言われた。その後、特に異常は感じていない。

### \* 事故原因

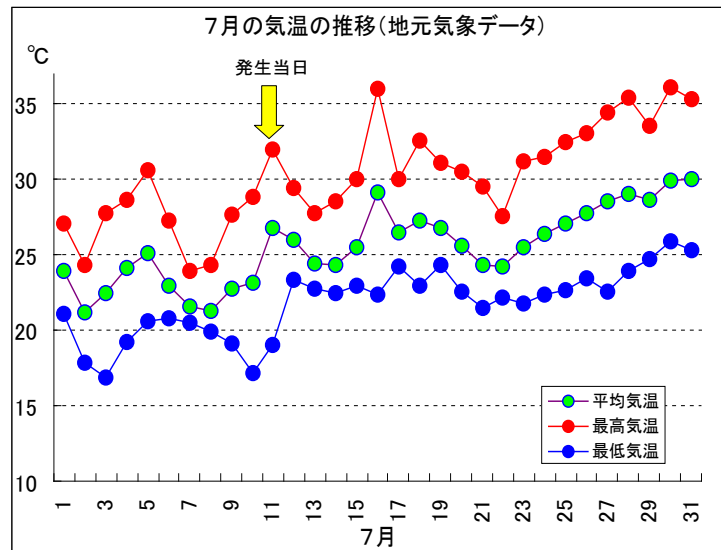
本人が腹部動脈瘤を抱えていることを自覚しており、異常発生とともに救急車の出動を要請、点滴を受けた。所見的には、おそらく軽い脳梗塞が疑われ、医療センターの丁寧な診断、処置が適切であったと考えられる。もし、放置されていた場合、どのような不測の事態が発生したか分からない。

なお、以前2箱以上飲んでいたたばこは10年以上前に、痰ががひどくなったのですばっとやめた。また、アルコールも2年前に動脈瘤が見つかった時点ですばっとやめた。既往歴は特になかったが、2年前のドック以降降圧剤を服用している

## ②早朝から夕方までの過労と急激な気温上昇がたたり熱中症にかかる

(平成24年 7月、11時頃、畑、男性・67歳)

本事例は、熱中症を強く疑われた事例である。熱中症は現象的には、発症した当日のみが問題視されるが、ご本人の作業日誌を見ると、発症以前にかなり無理をしている事が分かる。つまり連日の熱い中での作業、疲労の蓄積などにも充分考慮されなければならないことが分かり、以下のとおり時系列的に本症例について紹介する。



7月 11日

8:30 新潟から長野県へ梅の収穫に行く。

10:00 3本足の脚立で作業を開始、すでに体調が悪かった。

11:30 100kgの梅の収穫が終了。途中休みを取り、梅ジュースを2杯飲んだ。本当に美味しいと思った。当日は日照が強く具合が悪くなり3時ころまで昼寝をしてやっとの思いで帰宅した。

7月 12日

頭が痛く汗がものすごく出て、9時頃カゼと思い病院へ行く。医師に「熱中症」と言われ、水分・塩分を取るように助言される。

7月 13日

頭痛が続いていたが直売所「トマト」の役員をしている関係で50aのコスモスを植えるイベントがあり9時から11時30分までロープ張り(苗を植える目印)の作業にあたる。午後はとても起きていられなく、床につく。症状は、夜寒くなり発汗が多い。

7月 14日:以降 具合の悪い日が続く。

7月 25日

ゴルフへ。今まで経験したことのない程悪い成績、手先の微調整がきかないのではないかと思った。

7月 31日

ブロッコリー定植、50aを4人で作業、番茶に食塩を入れて水分と塩分の補給、カンカン照りで症状悪化する。

8月 1日

11頃まで2haの水田に20袋の穂肥をまくが、具合が悪くなり嘔吐する。頭を冷やして寝込む。

## \* 事故原因

7月に入り連日

4:30～7:30 トマト等の収穫作業

8:30～11:30 スパイダーモアでの草刈り

14:00～17:00 ビーバーによる草刈り

上記のような作業が続き、疲れが残っていたところに7月11日の梅収穫でのカンカン照りで熱中症の症状が出た。通常、帽子をかぶることが少なく、頭に直に日差しを受けていた。また水分補給に気を使ったことがなく、塩分・糖分の入った水の補給など考えたことがなかった。農作業に行くときはペットボトルを持っていくが、温まっていることもあり補給量も少ない。

なお、地元の気象データでは最高気温が7月7日 21.7℃・8日 20.0℃であったが9日 25.0℃・10日 27.0℃・11日 32.2℃と急激に上がっている。

また、長野の11日の最高気温は33.9℃と更に高く、収穫・草刈作業で疲れていたところに気温が急激に上がったことによって熱中症にかかったことが予想される。

熱中症の対策としては、涼しい時間帯に作業を行なう、帽子や麦わら帽をかぶる、塩分やミネラルの入った水分を小まめに取る、が重要である。

### ③自宅前の畑を日中耕耘後、キャビン付きトラクターのなかで亡くなっていた

(平成24年 7月、おそらく午後2時頃、畑のトラクター内、男性・86歳)

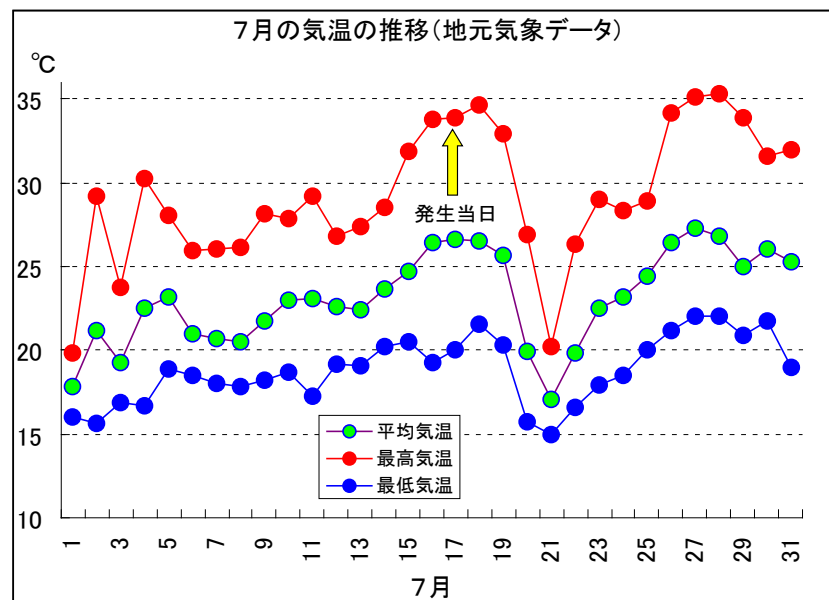
冷房付きキャビン付きトラクターで、自宅前の畑を耕耘し、終了した辺りでトラクターの運転台に腕をつき、眠るように亡くなっていた。

近所の人が気づき娘に電話。娘が「病院で待っているので救急車で連れてきてほしい」と頼んだが、もうそういう状況ではないということで検死。CTで死後の頭などは撮っても

らったが何もない。熱中症という言葉はなかった。突然心臓が止まったのではないかと。

自分の水田は1町歩だが他人の畑や水田を耕してあげることを楽しみにしていた。

傷病名は虚血性心疾患、にて死亡。



### \* 事故原因

家族の話によると、暑いとき、日中には滅多に農作業はすることがなかった。いつものように、午前中に耕耘を終わらせる予定だったが、「どうしても聞いてほしい」と友人が相談に来て、午前中は仕事が出来なかったようだ。午後は3時からの相撲の夏場所（3日目）を楽しみにしていたので、その前に終わらせたかったのではないか。また、孫や子どもたちの洗濯物を取り込むのも役割の一つだった。当日は梅雨が上がった2日目で、非常に暑かった。添付のグラフのように、前日から急激に上昇している。なぜかエンジンは切られており、冷房は効かず、ラジオだけが鳴っていたという。作業が終わったので、少し休もうとしたのではないかと推測される。